

「私たち家族は年老いて、残された時間はない。子供たちが一刻も早く祖国の土を踏んで、私たちを抱きしめてほしい。」*2021年9月3日、北朝鮮に拉致された横田めぐみさんの母、横田早紀江さんは、切ない胸の内をこう明かした。

横田めぐみさんが1977年11月15日に北朝鮮の工作員に拉致されてからまもなく44年が経とうとしている。拉致被害者家族の方々の切実な願いは、「アニメ『めぐみ』」で助けを求めて泣き叫ぶ「13歳の少女」に届かぬまま、ただ時だけが過ぎ去って行く。

昨年、拉致問題解決に向けた進展のニュースもない中で、ある悲報が届いた。妻の早紀江さんとともに拉致問題の解決に半生を捧げためぐみさんの父、横田滋さんのご逝去。もう一度、娘に会いたいという滋さんの願いが叶うことはもう無くなってしまった。横田さん夫妻とめぐみさんの双子の弟の拓也さんや哲也さんをはじめ、拉致被害者家族の方々は署名運動や講演を通じて、拉致問題の早期解決に向け歩み続けてきた。この問題を解決するために、私たち一人ひとりが拉致問題に関心を持ち、小さなことから行動を起こすことが大切だと考える。私が、10月にオンラインで拉致被害者家族を支援するかわさき市民のつどいに参加するのは、拉致の事実を知り理解するためだけではなく、被害者と被害者家族の方々の気持ちに共感し、心に寄り添いたいと思うからだ。

平和的解決を目指してきた拉致問題の影響を受けている国は日本だけではない。国連による拉致被害に関する調査報告によると、拉致被害者の出身国は14カ国に上り、世界では20万人を超えるとされている。これほど多くの人々が被害に遭い、そしてこれほど多くのご家族が拉致被害者の帰りを待ち続けているという現実は、私の想像を絶するものだった。これまで、拉致問題は日本と北朝鮮の二国間の問題として扱われる傾向があったが、この問題をグローバルな問題として認識し、各国間の協力体制を築き、働きかけていくことで解決への光が見えてくると私は信じている。

私たちは、拉致問題の事実真剣に向き合い、「私たち」にとって最も重要なこの問題を解決するために、より多くの人たちに情報を広めることにより、拉致問題に関心を持つ人たちを増やさなければならない。外国語コースの生徒として、私は、英語だけでなく中国語も向上させ、許しがたい人権侵害であるこの拉致問題を自らの手で国際的に伝えていきたい。さらに、国際バカロレア(IB)の学習を通して、視野を広げ、より効果的なメッセージを国際社会に発信し、世界中の人々に思いやりと共感を思い起こさせたいと心から願っている。思いやりと共感徐徐に紡がれ、やがて大きな力となる。

拉致被害者家族の方々が、最愛の家族との再会に残された時間はもう長くはない。拉致問題解決に向けた糸口をつくる(創る)のは私たちだ。

注) (冒頭部分以外の) 私たち=日本国民だけではなく、世界中の人々

*産経ニュース.「拉致解決『時間ない』被害者家族ら訴え 首相退陣受け」.

<https://www.sankei.com/article/20210903-4NVFFIGROJO3ZESG34JLYGS6DU/>, (参照 2021-9-3)

原文は「私たち家族は後がないほど老いて、残された時間はない。何とか、子供たちに一刻も早く祖国の土を踏ませ、私たちと抱き合わせてほしい」